The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

智積院新文庫聖教と浄土教典籍

能島覚

はじめに

京都東山の一廓の真言宗智山派総本山智積院に所蔵される聖教群は智山書庫・運敞蔵として収蔵されている。それは既に公にされている『智山書庫所蔵目録』二巻・『運敞蔵所蔵目録』で近世の学僧の研鑽を伝える一大コレクションとして知られている。近年、それに加えて智積院新文庫という中世の紀州根来寺の宝庫に由来を持つ書籍群があることが注目され、調査・研究が本格的に開始された。本研究はそれらの成果の一端として、その宝庫に収蔵される浄土教典籍について得られた知見を報告する。(1)

一　新文庫聖教とは

新文庫聖教とは総計六十函になる聖教群である。今回の調査では中途の四十二函までの調書作成を終え、主としてその中での成果の報告となった。智積院新文庫とは大正十四年に建立された智積院内の経蔵であり、御文庫、宝庫と呼ばれる。そして従来より根来寺から伝来した宝物・中世真言教学の根幹を成す書籍とおぼろげにいわれていた聖教群に対し、より具体的な認識を共有することができた。それは、天正十三年（一五八五）三月の豊臣秀吉による紀州攻めにより根来寺が灰燼に帰したことを受け、根来寺教学の復興を念願した洛東智積院の第一世玄宥、第二世祐宜、第三世日誉などの初期の智積院の能化により書写・収集された聖教群ということである。その伝持されたものに中世後期、和泉国の家原寺の学僧である亮盛や弘賢により書写・伝持された聖教群も含まれ、新文庫の中核となって聖教群を形成しているとの認識に至っている。

そのなかより、浄土教典籍に関して、これまでの日本浄土教研究でその名が知られていない資料を確認できた。更に、真言寺院と思われる遍照院における聖教目録（『遍照院聖教目録』）も検出され、この目録に注目すべきと思われる一節を

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

紹介したい。

二　真言寺院における浄土教典籍

『遍照院聖教目録』は料紙及び字体、法量より鎌倉後期のものと考えられる。この目録には華厳・天台・三論・法相・浄土・戒律・倶舎・禅の八宗の依用する経論章疏が列記されている。そのなかで、「浄土宗」は法相宗の次、菩薩戒儀（戒律）の前の第五番目に位置する。その内容は『長西録』のように経論そのものの立項はないが、経論に対する注釈書が主に列記されている。それも『観経』に対する疏がほとんどを占めているという傾向がある。また、中国宋代の元照の著述が三点も引かれてることと善導の五部九巻が全て並べられていることに目を向ける必要がある。善導や元照の著述が注目されるのは偏依善導一師を表明した法然の『選択本願念仏集』や元照の著述を引用するその門下の親鸞・長西の著述以降であるため、この部分の成立も鎌倉中期以降のものであると考えられる。そして、この「浄土宗」の項目で特筆すべき点はその末尾にある。そこに記される「具三心義」、「弥陀本願義」、「得生西方義」は撰者名が記されていないが実は法然門下の上足、隆寛律師のものであることは注目に値する。

「具三心義」「弥陀本願義」とは、昭和の初頭に金沢文庫より初めて検出された隆寛の著述である。「具三心義」は『観経』に説く極楽往生のための三心の内容・関係を注釈したものであり、その上・下巻の奥書に隆寛、自ら記したことが見受けられる資料である。次の「弥陀本願義」とは阿弥陀仏の四十八願に対する注釈を著したものであり、これのみ『長西録』に「無量寿経四十八願義四巻」と採録され、異名が載せられているが称名寺聖教の原本の内題・尾題は共に「弥陀本願義」である。そして、三点目の「得生西方義」は他の二書とは異なり散逸文献の名称である。古来より、信端の『明義進行集』の「又暮年におよびて、世の人の異義を破せんが為に、」というくだりに逸文が存在すると注意されてきた典籍である。

このように、この目録の「浄土宗」に隆寛のものが三点含まれることは興味深い事例である。なかでも『具三心義』、『弥陀本願義』は昭和の初めに突然、金沢称名寺の宝庫より見出されたもので、それまでは両書の名が仏教典籍目録に記されることはなかった。『長西録』に異名でこそ記されていたが、この目録のように「弥陀本願義」という呼び方ではない。そのような状況に本目録で『得生西方義』を加えて、三つの隆寛の著述が記されることは鎌倉期の浄土教研究にとって、貴重な資料であることが知られる。とりわけ、隆寛の著述は鎌倉期以後、その伝来がごく僅かであり、そのようなところに、真言寺院の経蔵目録に書名が記されていたことは興味を引き

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

つけられる。法然門下の上足の書が、遍照院という真言寺院の聖教目録へ採録され、架蔵されていたという事例は、法然門下と他宗への関わりという意味でも検討すべき課題になると思われる。ただし、この遍照院という場所・素性については検討を要する。

また今回の調査対象となったなかで『阿弥陀経私聞書』、『定善華台抄上』という新たな資料が検出された。前者は室町期の『阿弥陀経』の注釈書であり、後者は善導の『観経疏』「定善義」に関する論議を記したものであり、その首題下の識語より文和二年（一三五三）に行われた論議を記したものとわかる。更に『秘密念仏鈔』、『阿弥陀大心抄』、『一期大要秘密集』の古い伝本も検出され、今後の個々の資料研究に有益なものが確認された。

三　智山書庫蔵伝基『阿弥陀経疏』について

智山書庫本の『阿弥陀経疏』は従来の研究でほとんど知られていない奥書を有する貴重な伝本である。その理由は近代以降の活字版に収められたものは寛政四年刊の版本を底本としたものしかないということにある。寛政四年版の跋文の前には後批として、この『阿弥陀経疏』は入唐僧智証大師円珍が大中七年に福州開元寺常契より授けられたものとの由来が記されているが、その後の寛政四年になるまでの伝歴は審らかでない。つまり、この書は大中七年より千年弱もの間、その伝来は不明であったことになる。だが、智積院本の奥書には

後批云福州開元寺常契和上以大中七年九月日捨與珍／
件疏以貞元二年七月十五日書写了以御経蔵唐本写之／
右以延暦寺蔵本書写之蔵本睽字函也／
享保八癸卯十月朔始同八日閣筆釈重華記／
宝暦第五龍集乙亥冬十二月上四日於和州三輪山平等寺裡観音院之僑居写之／
周州釈正班／

と、版本には無い、大中七年以降の伝歴が記されている。すなわち、智積院本は貞元二年に御経蔵の唐本を以て写し、時は下って享保八年、延暦寺蔵本を重華が写し、最後に宝暦五年に周防の正班が大和の国の三輪山平等寺観音院にて書写したものとある。このうち、注目すべき点は、貞元二年に写した時の親本は延暦寺の御経蔵の唐本を用いているということである。御経蔵とは佐藤哲英氏「初期叡山の経蔵について―新出の『御経蔵目録』について―」（『佛教学研究』八・九、一九六三）によると最澄によって将来された一切経や章疏を収めた経蔵であり、その内容を記した資料に『御経蔵目録』と『御経蔵櫃目録』があるという。特に後者の『御経蔵櫃目録』には収蔵された典籍の内容を箱ごとに示しており、そのうちに「新渡唐本」を収めたという箱も存在したことが窺え

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る。これは、御経蔵に欠失があることを憂いた円珍が欠本目録を作成し、入唐の際、自身の手や弟子を使わしてその補充に努め、収めたものであるという。そうすると本書は、御経蔵の充実を企図した円珍によって大中七年に入手された写本を淵源に持ち、叡山の最も根本の経蔵に収められていた伝本の流れを汲む資料と考えることができる。従来、本書はその伝来の不明瞭さによりその真偽が疑われてきたが、少なくとも、伝基の『阿弥陀経疏』は円珍によって将来された後、叡山の中核である蔵に収められた典籍であると、本邦に伝来した後の足跡を智山書庫本の奥書より知られる。なお、龍谷大学にも『阿弥陀経疏』の写本（請求記号241、5/174-w）が一点あり、その奥書は智山書庫本の享保八年重華記迄の識語を確認できる。

以上、智積院新文庫には中世の真言寺院における浄土教の研鑽の跡を窺い知ることのできる聖教が存在することを知られる。今後はこれらの資料の内容の一々に検討を加え、日本中世の浄土教の一隅を明らかにしたい。

1　宇都宮啓吾「智積院新文庫の聖教について」、拙稿「智積院新文庫における浄土教典籍」、同「智積院新文庫蔵『遍照院聖教目録』翻刻」（科研研究『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』（平成20年度～平成22年度科学研究費補助金、基盤研究（B）、代表　宇都宮啓吾（大阪大谷大学教授：国語学））、二〇一一）。

〈キーワード〉智積院、真言寺院、浄土教典籍、『阿弥陀経私聞書』、『定善華台抄』、『遍照院聖教目録』

（佛教大学総合研究所嘱託研究員）

NII-Electronic Library Service